



礼二は酔った、酒におぼれて...

礼二は、どのようにして、この大学に入ったのだろうか？

短期大学だが、ほぼ1年だけ通って、残り1年は病院でレポートを書いただけ

病状は悪化して、酒におぼれていた

電車2本とバス、時には、バスではなくて、タクシーで、通った

礼二は、対人恐怖症とも診断されていたので、

酒を飲まないと、電車に乗ったり、人と話すことができなかった

女が大半で、男はごくわずか、という大学だった

外国人の生徒も多かった

特に、アジアや後進国の学生である

1度だけ、哲学の授業で、女の先生に「いい内容なので、読んでください」と、褒められたのが嬉しかった

フェミニズム論の授業も数回出たが、よく意味がわからなかった

年輩の女性の先生と仲良くなった

あと、保健室の、女の先生とも仲良くなった

後進国の、アジアの女の子たちとも話すようになったが、渋谷に1回デートにいった女の子を紹介されるくらいで、その子たちとは、あまり進展しなかった

部活は、バレーボール部に入ったが、男3人、女3人くらいしかいなかった

真面目にやっていたら、いろいろ言われたので、すぐに辞めてしまった

そのうちの1人の先輩は、1度俺を、取り立ての免許で、家まで送ってくれたが、車内にも何も話さず、ビーズのプレジヤのCDが流れていた

俺は、友達ができなかったので、校庭でサッカーボールを蹴って遊んでいた

時折、先輩の先生や、保健室の先生が、声をかけてくれた

図書館で、1学年上の、綺麗な女性の先輩と話をした

正直、緊張して、何を話したかも、憶えていない

でも、バレーボール部にいた、さっきのビーズの先輩と、恋人関係にあったかもしれないことだけはわかった

時はさかのぼる

オリエンテーションにおいて、生徒たちは全員、共同宿泊することになった

そこには、男女がいて、外国人もいて…

俺は、サッカーボールを蹴っていたら、男が集まって、皆で試合をした

寝る時は、忍び込みの話し合いになったが、

俺は、そんなことはせず寝た

バスケットボール場では、カッコイイ組とキモイ組が戦って、それを、女の群れが声援を送っている

なぜか、こういう時、俺は、キモイ組に加わってしまった

俺が、女に「ごめん」と言うと「ギャー！」という声が聴こえたが、その子は俺の顔をマジマジと見ると、その声をやめていた

えてしてそういうものだ

カッコイイ組では、カッコイイ先輩が、カッコイイ後輩に、「部活来いよ！」と、誘っていた、カッコ悪かった

年輩の先生に誘われて、教員室に入った

そこには、いろんな生徒が出入りしていた

女の子は、陽気に、北朝鮮の真似をして、おどけた

男は、文学の勉強をしていた

ある日、年輩の先生は、今度の謝肉祭で、文学の発表会があるから、あの箱の中に、文を書いて出してみたら、と、誘った

俺は、酒であまり記憶がないが、えみ、との、恋愛のことを書いた、といっても、ただ、闇雲に、「えみちゃんが好きだ、えみちゃんが好きだ…」というような、羅列を書いた文章を、

素直に書いていただけだった

テクニックも何も無い

しばらくして、箱を開けたのか、ある女性が、一番良かった、と言ってくれた、それは、俺の文が、ストレートすぎて、嘘がなかったからかもしれない

そんな記憶をもって、謝肉祭に出たら、発表会では、俺は少し期待してしまった、俺、大賞になってるかもしれない、と思ったからだ

しかし、大賞は、文学の男だった

俺は、いじけたフリをして、外に飛び出した

年輩の先生と、保健室の先生が、あとを追う

すべて、芝居じみていた

できすぎた芝居である

もちろん、俺も、文学のことは知らないし、文学の男の文のほうが素晴らしかったかもしれない、でも、勝手に、俺は恋をしてるのに、直球だったのに、という勝ち誇りがあった、もちろん、文学の男のほうにもあったかもしれないが、簡単に言えば、俺は負けただけだ

つまらない

俺はそう思った

文学の男は、ある日、俺にわからないことはない、と云った

じゃあ、こういうことは？ と聴くと答えていた気がする

では、こういうことは？ と聴くと答えていた気がする

ある日、俺は、何気なく、「あの校庭の子、かわいいね、彼女にしたい」と話した

すると、文学の男は、「そこで、言いに行かないと駄目なんだよ」と言った

俺は、それに腹を立てた

お前、やってみろよ

と思った

それ以来、付き合うのをやめて無視をするようになった

とある、謝肉祭では、

俺は、倦怠感の中にいた、

とにかくダルイ

ホールの講義のイスに座っていると、

文学の男が、スピーチをして喋っている

なんか、ずっと俺のほうを見ている気がした

嫌気がさしたわけではないが

とにかく、スピーチも怠かったので、

途中で出ることにした

文学の男は、俺が去るのを見ていた気がする

その後、俺は、家で暴れてしまった

厳密に言えば、母との関係が近すぎたことなのか、よくわからなかった

精神的な自立の時だと察した俺は、

しばらく、病院に入りたいと言った

俺は、普通の病院を予想していたのだが

檻に囲まれた、場所もわからない、東京の精神病院だった

俺は、もう大学に行くことはなかった

ただ、レポートを書けば、大学を卒業ができるということで、父に協力してもらい、なんとか、卒業することができた

レポートには、規則正しい生活が大事です、という論文を書いたら

母が褒め、先生方も、褒めていたと聞いた

俺は、また、素直に、ほんとうの気持ちを書いただけだった

牢獄の中で苦しい人生は続いた

人間関係という檻で、俺は絶望した

「完」